

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2017 春調査ニュースレター



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査は、干潟をはじめとした湿地生態系の健全性を測ることを目的に、干潟や淡水湿地を利用するシギ・チドリ類と絶滅危惧種であるズグロカモメ、クロツラヘラサギ、ヘラサギ、ツクシガモ(以下「シギ・チドリ等」という。)の個体数調査を、全国に約 140 箇所設置しているサイトで春期(4月から5月)、秋期(8月から9月)、冬期(12月から2月)の計3シーズンで実施しております。

本調査では、各シーズン中に基準日を設け全国一斉に調査を実施し、基準日近辺に国内に飛来するシギ・チドリ類等の総個体数を把握することを目的とした「一斉調査結果」と、シーズン中に飛来したシギ・チドリ類等が最も多く飛来した時の個体数を累計し、各調査サイトの環境収容力を把握することを目的とした「最大個体数結果」の2つの結果を報告しております。

「シギ・チドリ類調査ニュースレター」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年よりシーズンごとに発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことが出来ます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

また、各期の調査報告や年度ごとの総括報告書では、全調査サイト配置図や全調査対象種の内訳、各調査サイトにおける調査結果等をまとめております。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター



2017年 春期概要

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2017年春期の結果概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2017年度春期概要をお知らせします。

春期の個体数は減少傾向が止まる

2017年度春期調査は、2017年4月1日から2017年9月30日までの期間実施されました。119ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査(2017年4月23日を基準日とした前後1週間の調査)への参加は116ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類43種33,785羽が記録され、ツクシガモ423羽、ヘラサギ1羽、クロツラヘラサギ133羽、ズグロカモメ46羽が記録され、春期の全サイトの最大個体数(調査期間内に記録された各種個体数の最大値)の合計では、シギ・チドリ類 48種76,169羽が記録され、ツクシガモ1,136羽、ヘラサギ13羽、クロツラヘラサギ226羽、ズグロカモメ426羽が記録されました。

2000年からの「全サイトの最大個体数の合計」と「連

最大個体数合計

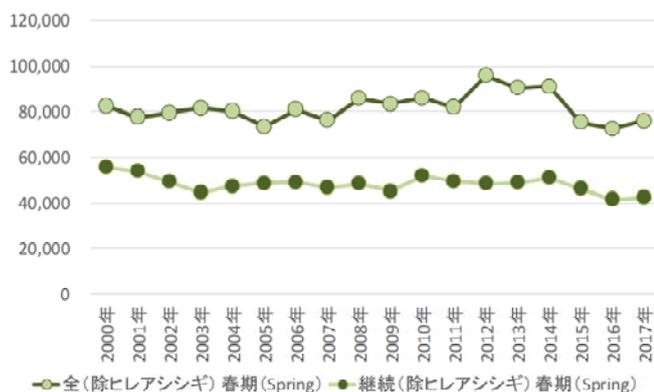


図1. 春期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移 (2000年から2017年の継続サイトN=44)

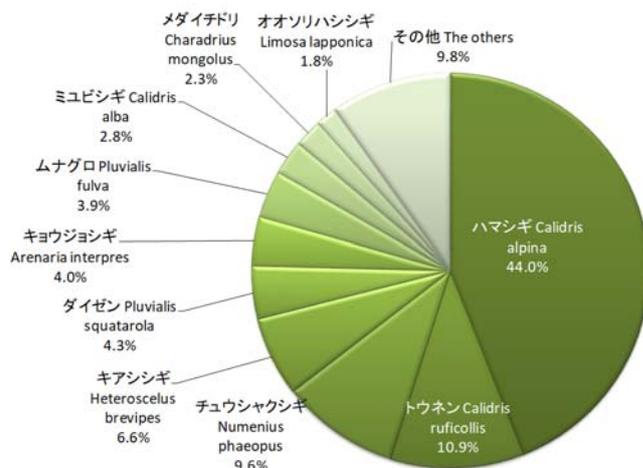


表1. 2017年春期調査の優占種

「継続して調査が継続されているサイトのみ」の最大個体数の合計」を、グラフに示しました(図1)。グラフは、海上生活者であるヒレアシシギ類は除外しました。全サイトの最大個体数の合計は、前年度春期と比べ約3,600羽増加(+4.9%)し、継続サイトでは前年度春期と比べ約900羽増加(+2.4%)して、過去最低水準を記録した昨年春期からやや増加しました。

最大個体数における優占種の上位5種は、ハマシギ(44.0%)、トウネン(10.9%)、チュウシャクシギ(9.6%)、キアシシギ(6.6%)、ダイゼン(4.3%)で、昨年春と上位種の順位に変動はありませんでした(図2)。最大渡来数が最も多いのは佐賀県大授搦、順に大分県中津干潟、千葉県三番瀬、熊本県荒尾海岸、球磨川河口、氷川と九州地域が上位を多く占めました。



写真1. チュウシャクシギ (写真:守屋年史)

年による増減が大きいトウネン

2000年から2017年までの春期最大個体数における上位5種の推移を示しました(図3と図4)。ハマシギは、春期に最も個体数の多い種になり、近年は減少傾向が続いていましたが、2017年度は昨年より約10%増加しました。トウネンはピーク時から約9,000羽ほど減少し3年連続で減少していますが、昨年より減少幅は-2.1%と小さくなっていました。過去には、今年度より少ない年があるものの今後も増減に注意が必要と考えられます。チュウシャクシギは約8,000羽で年により2,000羽ほどの振れ幅があり、全体的には徐々に減少傾向にありました。キアシシギ、ダイゼンは、年によって振れ幅はありますが個体数は安定していました。ここ数年で、減少傾向が見られる種としてキョウジョシギ、ムナグロがあげられ、ピーク時より個体数が3,000~4,000羽ほど減少しています(図5)。両種とも今年度はやや増加しました。オオソリハシシギ、メダイ

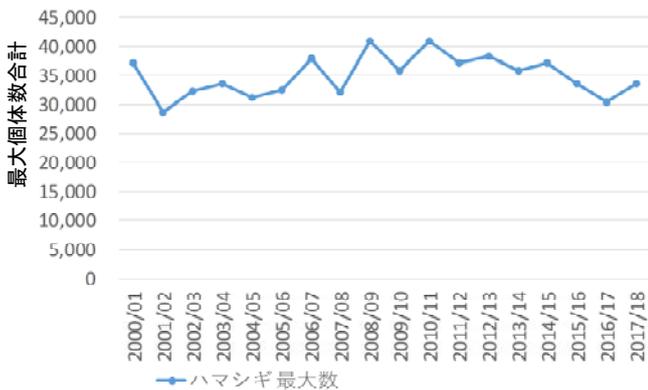


図3. ハマシギの最大個体数の推移

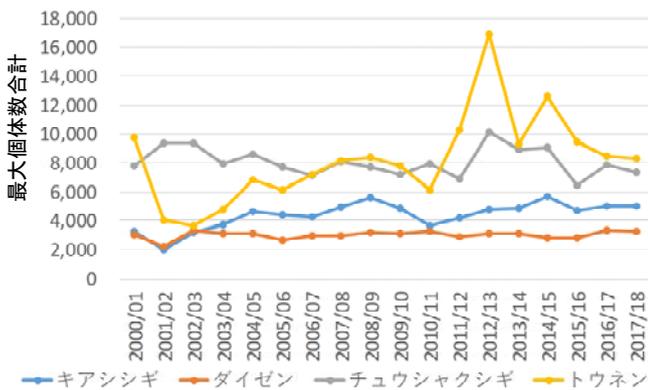


図4. トウネン、チュウシャクシギ、キアシシギ、ダイゼンの最大個体数の推移

オバシギ渡りの傾向が変わったか

チドリは2年連続して、昨年を下回っていました。シロチドリは徐々に減少し、今年度はやや増加しています。増加傾向の見られる種として、ミユビシギは、春期の個体数が増加傾向にありました(図6)。アオアシシギ、ソリハシシギ、ミヤコドリは徐々に増加していましたが、2017年度は3種とも前年を下回りました。オバシギは増減を繰り返しながら増加していましたが、2013年春に大きく増加した翌年大きく減少し、徐々に増加して年による振れがなくなり、渡りの傾向が変化しているかもしれません。

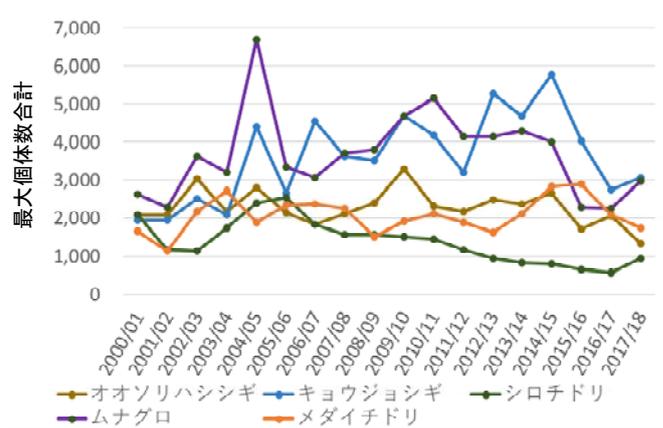


図5. 近年、減少傾向にある種の最大個体数総数の推移

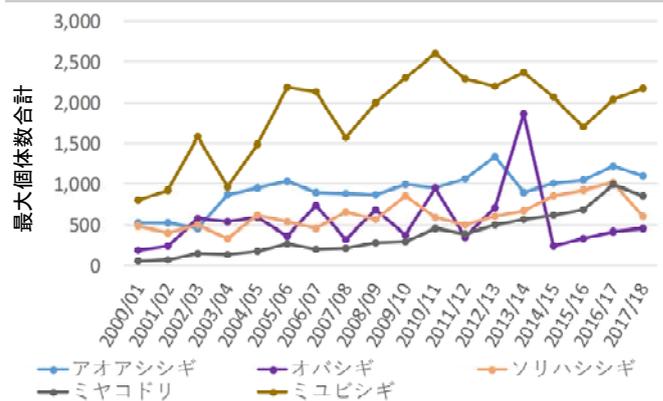


図6. 近年、増加傾向にある種の最大個体数総数の推移

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真: エリマキシギ(守屋年史) 2017年 春期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>
 編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>
 編集者 守屋年史 電話/Fax: 042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp